

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

レバノン南部の聖者アル・ホドル崇敬にみられる「
聖者の占有」とその背景：
歴史的パレスチナとの比較から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): saint veneration nationalism Islam Lebanon Palestine 作成者: 菅瀬, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003802

レバノン南部の聖者アル・ホドル崇敬にみられる
「聖者の占有」とその背景
—歴史的パレスチナとの比較から—

菅瀬 晶子*

“Possession of a Saint” and Its Background: Comparing Examples of
the Veneration of Sayyidnā al-Khader/al-Khodor
in Southern Lebanon and Historical Palestine

Akiko Sugase

イスラーム世界にあって、少数派のシーア派や、非ムスリムのキリスト教徒やドルーズが多数派を占めるシャーム地方では、ムスリムと非ムスリムが混住し、宗教・教派間の共存が保たれてきた。その状況を象徴するのが聖者崇敬の共有であり、なかでも聖者アル・ハディル（レバノンではアル・ホドル）は、歴史的パレスチナを中心に病の治癒や降雨、豊穡をもたらす聖者として、さかんに崇敬されてきた。ことに歴史的パレスチナでは、地元出身の英雄という点が強調されている。

歴史的パレスチナと隣接するレバノン南部でも、アル・ハディルはアル・ホドルと呼ばれ、複数宗教・教派信徒によって崇敬が共有されてきた。シーア派の村サラファンドにあるアル・ホドル・モスクには、周辺の町村からも非シーア派の人びとが参詣に訪れる姿がみられた。しかしながら現在、村外からの参詣はみられず、共有がそこなわれつつある。モスクも聖者崇敬の聖所というよりもシーア派色が強くなり、アル・ホドルをシーア派の正統性を保証する聖者と定義づけ、占有しようとする語りも出現している。このような現象の背景には、レバノン南部と歴史的パレスチナにおけるアル・ハディル／アル・ホドルの役割の相違や、双方の自然環境と農業形態の相違が挙げられるが、ヒズブツラーの勢力拡大に象徴されるシーア派ナショナリズムの高揚も大きく影響をおよぼしている。レバノン南部における聖者の占有は、すでに非シーア派の周辺

*国立民族学博物館研究戦略センター

Key Words : saint veneration, nationalism, Islam, Lebanon, Palestine

キーワード : 聖者崇敬, ナショナリズム, イスラーム, レバノン, パレスチナ

住民から警戒されており、シャーム地方で培われてきた宗教・教派間の共存を損なうおそれがある。

The coexistence of Muslims and non-Muslims has been very common in the Shām Area. Sharing veneration for certain specific saints reflects this coexistence, and the most popular example is veneration for Sayyidnā al-Khader. He is believed to cure all diseases and bring rainfall and fertility, and especially in historical Palestine, he is admired as a local hero.

Al-Khader is pronounced al-Khodor in Southern Lebanon, and he is also venerated keenly there. Al-Khodor Mosque in Sarafand, a big Shi'ite village near Saida, used to welcome non-Shi'ite pilgrims coming from neighboring towns and villages. However, these pilgrims ceased to visit the mosque. Now it has been renovated more as a Shi'ite sanctuary than a saint veneration center, and a new theory has appeared, defining al-Khodor as the assurer of the orthodoxy of the Shi'ite sect. As well as slight preexisting differences between the roles of al-Khader/al-Khodor, the natural environment and agricultural forms of historical Palestine and Southern Lebanon have had some influence on this change, but it is the rise of Shi'ite nationalism in Southern Lebanon, symbolized by the surge of Hizbullah, that has had a really potent influence on this tendency. Leading to caution among the neighbouring Sunni Muslims and Christians, the possession of al-Khodor by Shi'ites in Sarafand may limit the coexistence of Shi'ites and Sunnis, Muslims and non-Muslims in the Shām area.

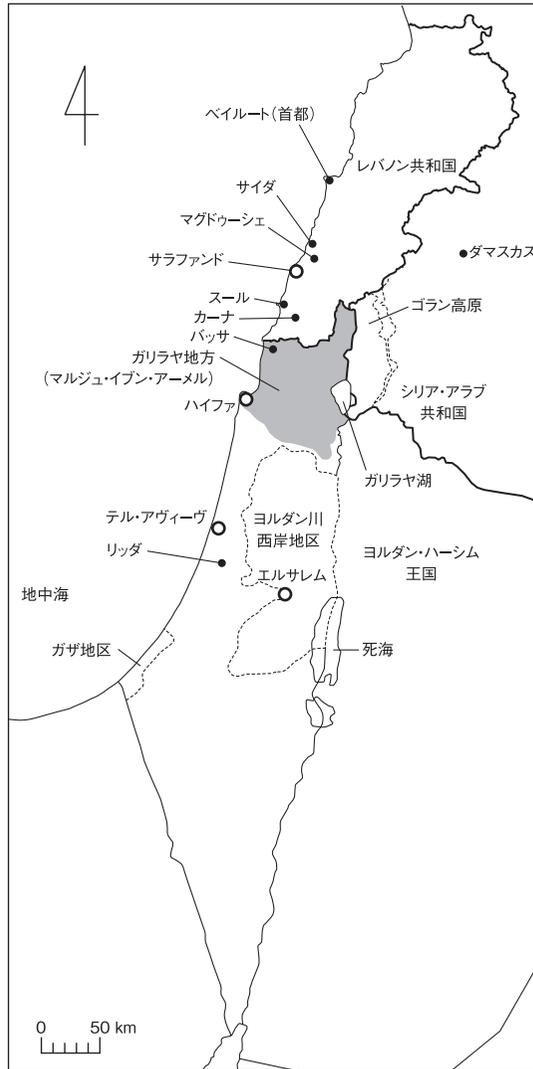
1 はじめに	3.2.5 シーア派化するアル・ホドル崇敬と、非サラファンド住民による批判
1.1 本論文の目的	
1.2 先行研究	
2 調査地について	4 聖者の共有から占有への移行が意味するもの
2.1 サラファンドについて	4.1 パレスチナにおけるアル・ハディル崇敬とサラファンドにおけるアル・ホドル崇敬の比較
2.2 レバノン南部とパレスチナ北部・ガリラヤ地方のかかわりと、両者を比較する意義	4.1.1 アル・ハディルの一般的役割
3 サラファンドの聖者崇敬	4.1.2 豊穡と郷土とのかかわりの欠落
3.1 シャーム地方におけるアル・ハディル崇敬の特徴	4.2 サラファンドにおけるアバー・ザッル崇敬
3.2 サラファンドのアル・ホドル崇敬	4.2.1 アバー・ザッルについて
3.2.1 サラファンドのマカーム・アル・ホドルと周辺的环境	4.2.2 サラファンドのマカーム・アバー・ザッルと崇敬の様態
3.2.2 マカームの歴史	4.3 アル・ホドルとアバー・ザッルの役割分担
3.2.3 1997年時のマカームと崇敬の様態	4.4 郷土に根ざすアイデンティティのゆくえ
3.2.4 2011年、2012年のマカームと崇敬の様態、および1997年時からの変化	5 むすび

1 はじめに

1.1 本論文の目的

本論文は、筆者が1997年より断続的に調査してきた、歴史的パレスチナ¹⁾を中心としたシャーム地方²⁾ (Bilād al-Shām, بلاد الشام) における聖者アル・ハディル (Sayydnā al-Khadir, سيدنا الخضر) 崇敬研究のうち、レバノン南部における調査の結果をまとめたものである。

筆者は2008年10月から2012年3月までの5年間、大阪大学世界言語研究センターの研究プロジェクト「民族紛争の背景に関する地政学的研究」パレスチナ班に参加



歴史的パレスチナおよびレバノン地図

し、歴史的パレスチナにおける聖者アル・ハディル崇敬の様態を調査した。アル・ハディルはクルアーンの洞窟の章に登場するとされるイスラームの聖者ではあるが、キリスト教の殉教聖人聖ゲオルギオス（アラビア語通称マール・ジルジス Mār Jirjis, مار جرجس,あるいはマール・ジュリエス Mār Jurīs, مار جريس, 写真1参照）、あるいは旧約聖書に登場する預言者エリヤ（アラビア語通称マール・エリヤス, Mār Ilyās, مار إلياسまたはアン・ナビー・イリヤー・アル・ハイイ, al-Nabī ʾIlyā al-Hayy,



写真1 典型的な聖ゲオルギオス（マール・ジュリエス）のイコン。2012年8月27日、パレスチナ自治区ヨルダン川西岸地区・ラーマッラーの変容聖堂にて撮影。



写真2 燃える馬車に乗って昇天する預言者エリヤ（マール・エリヤス）のイコン。2011年2月6日、シリア・ダマスカス旧市街のシリア正教会聖堂にて撮影。

写真2 参照³⁾と同一視され、それゆえこの地では、アル・ハディル崇敬がムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒、さらにはドルーズの間で共有されるのは、至極当然の事象であるにとらえられている。さらにはアル・ハディル崇敬は、ムスリムとキリスト教徒、ときにはユダヤ教徒に共有されることによって、歴史的パレスチナにおいて長年培われてきた一神教徒たちの共存を促していることがわかった。また、他の地域には伝わっていない、パレスチナ出身者の血をひくという伝承により、パレスチナに根ざすアイデンティティの象徴という役割まで果たしてきたことがわかった。パレスチナだけではなく、シヤーム地方の広範囲において、アル・ハディルは郷土と密接に結び付いた英雄、守護者という地位を得ているのである（菅瀬 2009; 2010; 2012）。

本論文における聖者崇敬とは、アル・ハディルなどの特定の聖者を集落や共同体の守護者として祀り、アラビア語でマカーム (maqām, مقام 写真3 参照)、あるいはマザール (mazār, مزار 写真4 参照)⁴⁾ と呼ばれる聖所を中心に崇敬し、願掛けなどをおこなうことである。聖所や、そこでおこなわれる祭は聖者崇敬を伝えてゆくうえで、非常に重要な役割を担っており、聖所がなんらかの社会的事情により消滅したり、祭が途



写真3 ナビー・サーレフのマカーム。2012年9月6日，イスラエル・アッカにて撮影。



写真4 マール・ジルジスのマザール。2011年2月2日，レバノン・ジュニエにて撮影。

絶えたりすると、聖者崇敬も衰退し、ついには忘れ去られる。歴史的パレスチナにおいては、1948年のイスラエル建国にともなうナクバ⁵⁾において、数多くのアラブ人村落が破壊され、そこにあった聖所も運命をともにした結果、聖者崇敬が途絶えたという事例が多数みられた(菅瀬 2012: 45-49)。ところが、現在イスラエル側に属するハイファでは、アル・ハディル崇敬が1948年以降にイスラエルへ移住したユダヤ人市民に受け継がれ、ユダヤ人市民とアラブ人市民の共存をあらたなかたちで創出しよ

うとしているという事例も、一部観察することができる。ハイファのアル・ハディル崇敬の拠点のひとつで、現在はモスクからユダヤ教徒の礼拝所に改装されている「預言者エリヤの洞窟シナゴーク」では、ユダヤ人市民がアラブ人市民の巡礼を受け容れ、みずからもアラブ人市民と同じ方法で願掛けをしているさまが観察できる。アル・ハディル崇敬が、今日もなお一神教徒たちの共存を結びつける要素として機能していることが、あきらかとなった(菅瀬 2012: 49-55)。

ところが、パレスチナとの比較調査のために訪れたレバノンでは、イスラエル建国以前は歴史的にも文化的にもパレスチナと非常に近い関係にあったにもかかわらず、また異なる事例がみられることがわかった。レバノン南部のシーア派村落サラファンド(al-Sarafand, الصرفند)では、かつてはおこなわれていたキリスト教徒やスンナ派信徒との聖者崇敬の共有がそこなわれつつあるという現象がみられた。具体的には、聖者崇敬のなかでも普遍的な存在であるアル・ハディルが、シーア派のみをイスラームの正統と保証する存在へと書き換えられ、シーア派のものとして占有されており、その結果他者からの崇敬が途絶えつつあるという現象がみられたのである。さらに、パレスチナでみられるアル・ハディルと郷土の結びつきがサラファンドではあまり重視されておらず、代わりに別の、シーア派に特徴的な聖者が郷土の守護者としての役割を担っていることも判明した。本論文は2011年2月と2012年1月～2月におこなったその調査結果をまとめ、パレスチナとの比較においてその現象が意味するところを論じたものである。同事例についてはすでに別論文でも触れてはいるが(菅瀬 2012: 37-40)、あくまで現象を確認した時点での論文であったため、その具体的な内容やサラファンドという村の背景については触れていない。

なお、アル・ハディルはパレスチナ方言の発音であり、レバノン南部ではアル・ホドル(al-Khodor)、シリア方言や一般名称としてはアル・ヒドル(al-Khidr)と発音される。そのため、以下よりサラファンドの事例のみアル・ホドルと表記し、歴史的パレスチナをはじめとした中東世界一般の事例についてはアル・ハディルに統一する。中東世界一般の事例もアル・ヒドルではなくアル・ハディルを使用するのは、方言の違いによる混乱を避けるためである。

1.2 先行研究

レバノンの事例に入る前に、①イスラーム世界における聖者崇敬研究、②イスラーム世界および東地中海地域におけるアル・ハディル崇敬研究、③レバノンにおける人類学調査、についての先行研究をまとめておきたい。

①イスラーム世界の聖者崇敬

ユダヤ教にはじまるアブラハム一神教のなかでもっとも新しく、それゆえに厳格な一神教と思われがちなイスラームではあるが、実際には数多くの聖者と呼ばれる存在が崇敬を受けている。聖者にあたる呼び名は地域によって大きな差異があり、レバノンやパレスチナを含む東地中海地域では、ワリー (walī), カディース (qadīs) と呼ばれることが多い。

イスラーム世界における聖者の分類には、1) スーフィズム (タリーカ) の祖やスーフィー、2) ムハンマドの血筋を引く人びと、3) ムハンマドの教友や偉大な学者、歴史上の偉人など、なんらかの意味でのイスラーム史上の偉人とされる人びと、4) イスラーム以前の預言者、5) 憑依により弁舌の力を得た者や異教徒 (ユダヤ教、キリスト教を含む) の聖者、古代信仰や昔の英雄など、イスラームの通常の価値観から逸脱する人びと、の5つに分類することができる (東長 2008: 31)。この分類からも、スーフィズムやイスラーム以前の宗教の影響を大きく受けていることがわかる。しかしながら、エジプト西部沙漠のベドウィンによる聖者崇敬には、スーフィズムの影響がまったくみられないと赤堀は指摘しており (赤堀 1996)、スーフィズムとのかかわりの度合いは、地域によって大きな差異がみられる。東地中海地域で聖者をさすワリーはスーフィズムの聖者 (上記の東長による分類 1)、カディースはキリスト教の殉教者・聖人 (同分類 5) をさす。本論文で扱うアル・ハディルは、分類 4 と 5 に該当する。

聖者の定義はスンナ派とシーア派で異なり、またスーフィズムにも独自の定義が存在する (東長 2008: 19-39)。しかしながら、イスラーム法学者たちが長年に渡って練り上げた定義は難解で、一般信徒に理解されているとは言い難い。一般信徒が聖者を敬う理由はきわめて明快である。すなわち、聖者が奇跡を起こし、神との間をとりなして人びとにバラケ (baraka (正則語読みではバラカ)) を授ける存在であるからである。奇跡 (ajīb, ajāib) にはいくつかの類型があり、瞬間移動や空中浮遊、病の治癒などがその典型である。バラケは神の恩寵、ご利益を意味し、その存在についてはイスラームにおいては特に議論がされることもなく、存在するものと考えられている。

イスラームにおけるスーフィズム・聖者崇敬研究は、フランスの国立科学研究センターの人文社会学部門でさかんにおこなわれてきた。しかしながら、キリスト教における守護聖人概念の押し付けや、スーフィーとその実践を研究対象とするためにつくられた「スーフィズム」という語のオリエンタリズム性など、さまざまな問題がみられると赤堀は指摘している (赤堀 2005: 7)。また、日本においてもスーフィズム・聖

者信仰研究は長年おこなわれてきており、赤堀や私市（1996; 2005; 2009）、東長などによる蓄積がすでにある。しかしながら、聖者をあらわす単語に地域差がみられることからわかるように、聖者崇敬は地域ごとの特色が非常に強く、一般化が難しい。彼ら日本のスーフイズム・聖者崇敬研究者がフィールドとしてきたマグレブ諸国やエジプトの事例は、本論文で扱う東地中海地域の事例とはかなり性格が異なるため、ここにその事例を並べてレバノンの事例と比較することは避けたい。

②イスラーム世界および東地中海地域における聖者アル・ハディル研究

前述のように、アル・ハディルはクルアーンの洞窟の章に登場し、預言者ムーサー（モーセ）に神のはからいの深遠さについて教える聖者とされている。アル・ハディル崇敬はイスラーム世界全体でみられ、バルシヤ湾岸では船乗りの守護者として、インド、パキスタンなどそのほかの地域では泉や湧水と、それにかかわる職業に就く者の守護者として崇敬を受けており、水とのかかわりが深いことが特徴である（村山 2007; 家島 1991; 2006）。また、あらゆる病を癒し、女性に子宝を授ける存在であるといわれている（菅瀬 2012）。つまり、アル・ハディルのバラケによって、病の治癒や子宝の授与、さらにはあらゆる現世利益の成就が得られると信じられているのである。

イスラーム世界のうちでも、キリスト教徒やユダヤ教徒が多く住んでいる東地中海地域では、他の地域とは異なる特色がみられる。アル・ハディルは旧約聖書に登場する預言者エリヤや、4世紀に実在したとされるキリスト教の殉教者ゲオルギオスと同一視され、ムスリムの間ですら、むしろイスラームにおけるイメージよりもエリヤやゲオルギオスとしてのイメージのほうが一般的ですらある（菅瀬 2012: 19）。アル・ハディル崇敬がキリスト教徒やユダヤ教徒と共有されているのは、このような背景によるものである。

パレスチナにおけるアル・ハディル崇敬の特徴としては、農業と密接なかわりが挙げられよう。パレスチナには、おそらくは東方正教の暦を基準として作られ、今日も農作業の基準とされている農耕暦があるが、この農耕暦において聖ゲオルギオスの殉教祭（11月16日）と、彼の有名な逸話である竜退治の記念祭（5月6日）が、それぞれ雨季のはじまる日と終わる日であるとされている。リッダでおこなわれる殉教祭（リッダ祭）は、ちょうど収穫期の終わるオリーブの収穫を感謝するという意味合いも強い。また、聖ゲオルギオスはパレスチナのリッダで殉教し、今もその墓所の上に教会が建つが、実は彼の母親はベツレヘム郊外の出身であり、彼自身も幼少時をそ

こで過ごしたという伝承がパレスチナには残っている。このため、ことに聖ゲオルギオスとしてのアル・ハディルはパレスチナの守護者と位置付けられ、今日はパレスチナ・ナショナリズムを鼓舞する存在にまでなっている。パレスチナという土地との強い結びつきが、この地におけるアル・ハディル崇敬最大の特徴といえよう（菅瀬2012）。

③レバノンにおける人類学的研究

レバノンを対象とした人類学的研究は、これまでにフアード・フーリーらネイティヴの研究者によってある程度なされてきた。農村から都市への人口移動の様態（Khuri 1975）や、宗教的マイノリティのドルーズの民族誌（Khuri 2004）など、フーリーの著作はすでにレバノンのみならずシャーム地方全体における人類学的研究の古典となっている。しかし、現在失われつつある農村部の生活誌をまとめたファリーハの著作（Farīha 1989）は、懐古趣味的な内容に終始し、またレバノン内戦以降の社会変動にあわせた内容ではない。

ただし、レバノン内戦のさなか1982年に発足し、南部とベカー高原を中心に勢力を拡大してきたシーア派武装政党ヒズブッラーにかんする研究は、多方面から進められてきている。日本でも末近浩太（末近2013）らによる研究が成果を挙げているが、党首であるハサン・ナスラッラーの演説分析や声明、福祉活動の実践などに的を絞っており、いずれもヒズブッラーの姿勢に共感を寄せる立場からその活動を評価していることが特徴である。

ヒズブッラー以前の時代をも含めたレバノン南部のシーア派に焦点をあてた人類学的調査では、自身もイラン系であるシャーリー＝アイゼンロールによるものももっとも包括的であろう。彼女は1960年代以降のレバノンにおけるシーア派ナショナリズムについて、商業・政治的実権を握るマロン派カトリックやスンナ派から貧困者として切り捨てられてきたシーア派と、彼らの居住地である南部やベカー高原の地位向上・名誉挽回運動と定義づける。シーア派ナショナリズムと、イラン・イスラーム革命（1979年）からの直接的影響のもと、1982年のイスラエルによるレバノン南部占領に対抗すべく発足したのがヒズブッラーである。しかしながら、反イスラームとしてのイスラエルに対する闘争がその主要な活動目的であるヒズブッラーとイラン革命では、両者のめざす革命の性質は異なっていると彼女は論じている。また、メソポタミア神話に登場するタンムゥズやアドニスの死（犠牲）と再生（救済）の物語を好むイランの土壌が、シーア派でもっとも重要な宗教行事とみなされるフセイン殉教記

念祭・アーシューラーにも反映されているという先行研究 (Korom 2003) や、ヒズブッラーの精神的指導者とされる人物のインタビューを参考に、レバノンにおいてヒズブッラーが果たした役割を分析している。すなわち、悲劇性を好むイラン的な革命の精神を、西洋による植民地支配からの自主独立というアラブ・ナショナリズムの理論をもって、アラブ国家であるレバノンに定着させたのがヒズブッラーだと結論づけている (Shaery-Eisenlohr 2008)。ただし、タンムウズやアドニスに代表される死と再生の物語は、メソポタミアからエジプトに至る地域に共通する神話であり、聖者アル・ハディルにも引き継がれ、必ずしもイランに限定されるものではない。死と再生の物語が好まれるのは農耕社会の特徴であり、むしろ中東のなかでも農耕のさかんな地域であるイランとレバノンの共通点といえる。

シャーリー＝アイゼンローの著作の後半部分には、キリスト教徒との共存のため、ヒズブッラーがおこなっているところみについて軽く触れている部分があるが、その内容についてはほとんど踏み込んでいない。ほかのヒズブッラー研究を見渡しても、ヒズブッラーによる他宗教・教派信徒との共存に向けての活動に焦点をあてている研究は、ほとんどないといってよい。

そのような意味で、本研究は聖者崇敬研究と複数宗教・教派信徒の共存という、これまでにない視点からのレバノンのシーア派考察といってもよいであろう。

2 調査地について

2.1 サラファンドについて

まずは、調査地であるサラファンドの概要とその歴史について、簡単に触れておく。

サラファンドは、レバノン南部の中心都市サイダから、海沿いに約 15 km 南下したところに位置する。サイダ同様、かつてはフェニキア人の拠点として栄えたスールに向かう街道ぞいに面している。

村の歴史は古く、その起源はフェニキア時代にさかのぼる。サラファンドとは、フェニキア語で溶接を意味し (al-Rīs 2009: 24)、青銅器や鉄器、ガラス、陶器の生産がさかんであったようだ。海岸部の遺跡からは、後期青銅器時代や鉄器時代の遺物も出土している。ただし、サラファンドはフェニキア人の集落というよりもむしろ、旧約聖書に登場する漁村サレプタとしてその名を知られている。というのも、かつてサレプタとこの村が呼ばれていた時代、預言者エリヤが神の助言に従ってここに住み、

身の回りの世話を受けたやもめの長男を甦らせるという奇跡を示したとされているのである。預言者としてのエリヤがはじめておこなったこの奇跡の物語は、列王記上17章8節～24節に記されている。

1世紀以降はローマ時代を通じて、サラファンドはキリスト教徒の村と認識されていた。その後、レバノン南部がイスラーム化するにあたって、この地の住民も7世紀中葉、つまりかなり早い時期からムスリムとなった。レバノン南部やシリアに最初に布教したのは、アリー派に属するムハンマドの教友、アブー・ザッル・アル・ギファールー（Abū Dharru al-Gifārī, أبو ذر الغفاري, 通称アバー・ザッル（Abā Dharru, أبي ذر）である⁶⁾。彼は第3代カリフであるウスマーンや、のちにシリアのダマスカスを首都としてイスラーム帝国ウマイヤ王朝をひらくムアウィヤとは、対立関係にあった。このため、アバー・ザッルの影響下にあったレバノン南部は、イスラームの伝播当初からシーア派に属し、今日に至っている。

今日のサラファンドは、人口約2万のやや大きな規模の村である。人口のほぼ100%をシーア派ムスリムが占め⁷⁾、バナナや柑橘類の栽培を中心とした農業、漁業、ガラス工芸などの手工業やサービス業が、村のおもな産業となっている。村は沿海部と、海に面した丘陵部からなり、両者の間にはバナナなどの果樹園が広がっている。交通の要所は海岸部をつらぬく、サイダやスールに通じる街道であり、その周辺に商店が立ち並んではいるが、丘陵部にも多くの店舗が存在する。そのため、村の外部へ出る必要があるときを別とすれば、丘陵部に住む人びとが沿海部に降りることはほとんどない。沿海部と丘陵部に住む人びとの生活圏は、ほぼ分かれているといつて過言ではなく、このことが後述するように、サラファンドの聖者崇敬の傾向にも如実にあらわれている。

2.2 レバノン南部とパレスチナ北部・ガリラヤ地方のかかわりと、両者を比較する意義

ところで、今日はレバノン、シリアなどの国名で呼ばれているシャーム地方諸国であるが、現在の国境と、古来より用いられてきた文化的・地理的基準に基づく地域区分は、やや異なる。レバノン南部は、イエメンからこの地に移住してきたアーメル族にちなみ、アラビア語でジャバル・アーメル（Jabal ‘Āmil, جبل عامل）と呼ばれてきた。しかしながら、本来のジャバル・アーメルは現在イスラエルに属するパレスチナ北部・ガリラヤ地方、ことに上ガリラヤと呼ばれる山地も含まれていた。さらに、下ガリラヤに相当する草原が、「アーメルの息子である草原」を意味するマルジュ・イブ

ン・アーメル (Marj ibn ‘Āmil, مرج ابن عامل) と呼ばれてきたことからわかるように、かつてレバノン南部からガリラヤ地方にかけての一带は自然環境的・歴史的背景を共有する、ひとまとまりの地域として扱われてきたのである。このことは両地域に居住する住民の宗教にもあらわれている。レバノン南部はイスラームであればシーア派、キリスト教であればメルキト派カトリックが多く、地域によってはマロン派カトリックも居住する。1948年以前のガリラヤ地方にも同じ傾向がみられ、たとえばレバノン国境近くに1948年まで存在していたバッサ村 (al-Bassa, البصة) は、メルキト派を中心とするキリスト教徒と、シーア派が多数派を占めるムスリム、ユダヤ教徒が混住するアラブ人集落であった (Khalidi 1992: 6-9)。しかしながら、ナクバによってバッサをはじめとしたシーア派の居住する村は破壊されたため、現在イスラエル国内にシーア派ムスリムの住民は存在せず、彼らが存在したという記憶すら風化している。

このように、かつては歴史的・文化的にひとまとまりの地域とみなされていたレバノン南部とガリラヤ地方であるが、1948年にシオニズムに基くユダヤ人国家イスラエルが建国されることにより、両者は事実上分断された。その結果、イスラエル側に属すようになったガリラヤ地方では、ナクバ時のアラブ農村破壊や農村から都市部への人口流出が原因となり、アラブ文化の衰退がさまざまな局面でみられるようになった。聖者崇敬もその一例であるが、いっぽうで中東・中央アジア系のユダヤ人市民によってアル・ハディル崇敬が継承され、彼ら実践者はアラブ人市民との聖者の共有を肯定的にとらえているという現象が現在一部でみられることは、すでに本論文の1でも述べたとおりである。

アル・ハディル崇敬は、レバノン南部とガリラヤ地方の双方で1948年よりはるか以前からおこなわれ、なおかつムスリムとキリスト教徒に共有されてきたものである。歴史的・文化的に長らく同一圏とみなされてきた両地域が分断され、交流を絶たれて数十年を経た今、アル・ハディル崇敬とムスリム・キリスト教徒の共存状態は、レバノン南部でいかなる状況を呈しているのであろうか。本論文は、その問いに対する答えを聖者崇敬の変化から探ることをこころみた結果である。ナクバ以前のバッサ村にはマカーム・アル・ハディルが存在し (‘Arrāf 1993: 181)、キリスト教徒とムスリムに聖者崇敬が共有されていた⁸⁾。ナクバ以前のガリラヤ地方でみられたであろう、キリスト教徒とムスリムによる聖者の共有の様態を考察するためにも、レバノン南部の事例を観察することは有効であろう。

3 サラファンドの聖者崇敬

サラファンドには、二か所の聖者崇敬の聖所が存在する。この二か所は、祀っている聖者も違えば、その性格もまったく異なっている。本章では、それぞれの特徴と役割から、レバノン南部におけるシーア派ムスリムと、スンナ派ムスリムやキリスト教徒など他宗教・宗派信徒の関係を読み解いてゆく。

3.1 シャーム地方におけるアル・ハディル崇敬の特徴

パレスチナではアル・ハディル、レバノンではアル・ホドルと呼ばれるこの聖者の名を直訳すると、「緑の男」である。イスラームでは、クルアーンの「洞窟の章」59(60)節から81(82)節にかけて登場する、ムーサー(モーセ)の忍耐力を試し、彼に神のはからいの深遠さについて教えを受ける神秘的存在が彼であると考えられている。

しかしながらシャーム地方において、彼はむしろユダヤ教やキリスト教的要素を多分に帯びた存在として、より認知されている。前述のとおりサラファンドに非常に縁のある旧約聖書の預言者エリヤや、初期キリスト教の殉教者である聖ゲオルギオスと同一視され、アイコンに描かれる彼らの姿で、アル・ハディルを思い浮かべるムスリムがほとんどである。イスラームの聖者ではあるものの、キリスト教徒が熱心に崇敬する聖者とも認識されており、すべての一神教徒が共通して崇敬する存在であるとみなされている。ことにパレスチナでは、聖ゲオルギオスの母親はベツレヘム郊外の出身であり⁹⁾、そのため聖人自身もその地で幼年時代を過ごしたとされており、また殉教を遂げたのもパレスチナのリッダであるため、郷土の英雄として非常に高い人気を誇っている。

アル・ハディルはまた、降雨と豊穡をもたらす聖者であるとみなされ、人びとは彼の名を唱え、降雨や子どもの誕生、病の治癒を祈願する。聖者崇敬において、聖者が祀られる場所はマカーム、まれにマザールと呼ばれるが、これらの場所で祈願が随時おこなわれている。キリスト教に属するアル・ホドルのマカームでは、毎年決まった日に祭がおこなわれ、近隣のみならずかなりの遠方からも巡礼者が詰めかける。5月6日の聖ゲオルギオス祭¹⁰⁾、7月20日の預言者エリヤ祭¹¹⁾、11月16日のリッダ祭(聖ゲオルギオス殉教祭)¹²⁾が有名である。

アル・ハディルへの崇敬はイスラーム世界全般で見られるが、シャーム地方のみで

みられる特徴が二点ある。ひとつは、アル・ハディルのマカームに集う人びとの属する宗教・教派が、その場所を管理している宗教・教派に縛られることがないという点である。つまり、アル・ハディル崇敬はすべての一神教徒に共有され、その拠点であるマカームがイスラームあるいはキリスト教会いずれに所属する場所であろうとも、そこに異なる宗教・教派に属する者が詣でることになら問題はないと受け止められているのである。また、イスラームに属するマカームで、聖ゲオルギオスのイコンが奉納されているという事例は、しばしばみられる。もっとも、なかにはムスリムのみ、キリスト教徒のみのマカームも存在し、聖者の共有が日常的にみられる場所は、数あるアル・ハディルのマカームのなかでも一部に限られている。

二点目として挙げられるのは、ムスリムよりもむしろキリスト教徒がアル・ハディル崇敬の主導権を握っているという点である。筆者が確認している限りでは、アル・ハディルのマカームまたはマザールはシャーム地方全域に40か所存在するが、このうち近隣だけではなくかなり遠くの場所でも名前が知られており、崇敬の中心地とみなされている場所は、いずれもキリスト教会が管理する場所である。これらの場所でおこなわれるアル・ハディルの祭も、すべてキリスト教会が主催し、その担い手はキリスト教徒である。また、前述のようにシャーム地方のムスリムは、本来イスラームの伝承では白髯の老人というイメージを伴うはずのアル・ハディルを、イコンに描かれるときの聖ゲオルギオスや預言者エリヤという、きわめてキリスト教的なイメージで思い浮かべるのが常である。アル・ハディル崇敬におけるキリスト教徒の影響力の強さは、聖者の共有がみられるマカームの大多数が、キリスト教会が所有する聖所であるという点からもうかがい知れる（菅瀬2012: 22-34）。その意味では、イスラームのモスクであり、周辺住民がほぼシーア派信徒のみで構成されるサラファンドのマカームは特異な事例ということができよう。

3.2 サラファンドのアル・ホドル崇敬

3.2.1 サラファンドのマカーム・アル・ホドルと周辺的环境

サラファンドにおけるアル・ホドル崇敬の中心もまた、マカーム・アル・ホドルである。本項では、2012年1月～2月の調査で得た情報をもとに、現在のマカームとそこでみられる聖者崇敬の様態、さらにはマカームの位置する周辺的环境について述べる。

マカームは沿海部を貫く、サイダとスールにつながる街道沿いから、20mほど海岸に寄った住宅地の中にある（写真5参照）。マカームの西向かいには民家が一列並



写真5 サラファンドのマカーム・アル・ホドル。2011年2月1日、レバノン・サラファンドにて撮影。



写真6, 7 マカーム・アル・ホドル周辺の商店や個人病院の看板。いずれもホドルという個人名が記されている。2012年2月3日、レバノン・サラファンドにて撮影。

んでいるが、その背後は地中海である。周辺住民は小売業や漁業に従事し、商店や個人開業医の看板に記された名の多くがホドルである（写真6, 7参照）。みな、アル・ホドルにちなんで名づけられたとのことである。

さて、この聖所は、通称としてマカームと呼ばれてはいるものの、正式名称はアル・ホドル・モスク（Masjid al-Khodor）である。一日5回の礼拝時にはここからアザーンが流され、近隣住民の礼拝所として機能している。サラファンドのような村落部のモスクには通常、礼拝時間とその前後以外に人が集まるということはあまりないのが常である。ところが、ここには数は少ないながらも、礼拝時間外でもしばしば立ち寄る者がある。彼らはアル・ホドルに祈っているのかという筆者の問いに肯き、日々の感謝や小さな願掛け（遠出する前の安全祈願や、無事帰宅できたことへの感謝、体調



写真8 マカーム入り口に置かれたモフル。2011年2月1日、レバノン・サラファンドにて撮影。

不良の緩和祈願など)のためにこの場所を訪れていると答えた。願掛けがおこなわれるのは、マカームと呼ばれる聖者崇敬の聖所の特徴である。ただし、通常キリスト教会の所有するマカームでは、アル・ホドルと同一視される聖ゲオルギオスや預言者エリヤの聖日に祭礼がおこなわれるが、このサラファンドのマカームでは、アル・ホドルにちなんだ祭礼は一切催行されない。唯一おこなわれるのがアーシューラーだけであるという点に、このマカームがシア派の礼拝所であるという特色があらわれている。

建物の内部は3つの空間からなり、いずれも絨毯が敷きつめられている。来訪者はまず、入り口の回廊部分で靴を脱ぐ。右手には数珠と、シア派のみが礼拝に用いるモフル¹³⁾が籠に盛られて積んである(写真8参照)。かぎ型の回廊部分の右手には、正方形に近い礼拝室があり、この部屋にキブラも存在する。来訪者はここに入り、自由に礼拝することができる。

回廊部分から礼拝室に入ると、左奥のすみに、アル・ホドルへの祈祷文が壁にかかっている(写真9, 10参照)。アル・ホドルに願掛けをする者は、この前で祈る。また、祈願者の中には、この一角に下がっている2基のシャンデリアに、細長く裂いた布を結びついたり、礼拝で用いる数珠をかけたりする者もいる(写真11参照)。これは、聖者に願掛けに来たこととその内容を覚えておいてもらうためとされ、中東全域の聖者崇敬の聖所でしばしばみられる光景である。祈願者のなかには、聖者の徳(バラケ, al-Baraka)を得るために布や数珠を持ち帰る者もいる。布の多くはイスラ-



写真9 マカームの礼拝室。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。

ムで聖なる色とされる緑色であるが、キリスト教会が管理するマカームでも緑色の布が祈願用に配られている場合も多く、イスラーム以前の風習に根ざすと言いつわされている。

マカームに常駐している者はおらず、向かいに住む女性が有志として清掃や管理をおこなっている。彼女によれば、このマカームに子宝祈願をする女性が非常に多く、彼女自身もそうして子どもを授かったのだという。また、病氣平癒祈願のために訪れる者も多く、サラファンドの住民（つまりシーア派ムスリム）のみならず、サイダヤスール、周辺の村落から人びとがやってくるという。このとき、彼女はキリスト教徒が来ることを強調した。スンナ派の参詣者があるかどうかについてはなにも触れず、筆者が「スンナ派も来るのか」と問うたところ、来ると回答した。

2012年、筆者はここに10日間ほど通ったが、その間見かけた参詣者は、すべて村のシーア派信徒であった。また、サラファンドの丘陵部から参詣に訪れる者はなく、すべて近隣の沿海部の住民であった。

3.2.2 マカームの歴史

現在、サラファンドの住民のなかで、マカームの歴史について詳しく知る者はいな



写真10 写真9の中心部分（シャンデリアの陰になっている部分）の拡大。アル・ホドルへの祈禱文と、アリーの絵姿。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。

い。その過去の姿については、いくつかの文献からうかがい知ることができる。

筆者がサラファンドのマカームについて知ったのは、アル・ハディル崇敬研究をはじめた当初、エルサレムで入手した“EL-KHADR” and the Prophet Elijah”という書物によってであった。本書はエルサレムのフランチェスコ会が出版したものであり、著者はカプチン会の修道士であるアウグスティノヴィッチである。

アウグスティノヴィッチはまず、前述の旧約聖書列王記上にみられる預言者エリヤのエピソードを紹介し、4世紀後半の神学者聖ヒエロニムスの時代、すでにサラファンドにエリヤの聖所があったことを指摘している。十字軍のころには、エリヤが寄宿していたやもめの家とされる場所も残っていたという。その後、なんらかの事情でその家は破壊され、同じ場所にムスリムが小さなモスクを建設したが、それがいつのことであるのかは不明であるという。記録にこのモスクが登場するのは、フランス人の



写真 11 布や数珠が結びつけられたシャンデリア。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。

ゴジョンによる巡礼記（1668年）が最初である（Augustinović 1972: 37）。

19世紀末、シナイ半島からパレスチナにかけて旅行したイギリス人スタンリーは、このモスクを訪れ、「アル・ハディルに捧げられた廟ではあるが、墓そのものはない」と記述している。墓がない理由について、彼は以下のような、地元の農民たちによる語りを引用している。

アル・ホドルはまだお亡くなりになっていないからです。彼は世界を飛び回っていて、この礼拝所は彼が出現した場所に建てられました。毎週木曜日の夜と金曜日の朝には、礼拝所の中で光が強く輝き、誰も入ることができません（Stanley 1871: 268）。

前述のとおり、マカームとは聖者が訪れた、あるいは顕現した場所という意味であって、墓所という意味ははじめからない。ただし、形状は遺体を納める棺を模したものである場合が多く、そのため部外者は「廟」「墓所」であると誤解してしまうのであろう。元来、イスラームにおいてアル・ハディルは不老不死とみなされているた



写真 12 1997年時の写真9の壁。聖ゲオルギオスの複製アイコンが認められる。1997年4月11日、レバノン・サラファンドにて撮影。

め、墓所があるのは矛盾している。マカームに詣でる者たちも、そこにアル・ハディルの遺体があるとは考えておらず、形式上墓のかたちをとっているのみであるという共通認識を持っている。

また、アル・ハディルが世界中を旅しており、木曜の夜や金曜に、イスラーム世界の各地にある聖所にあらわれるという伝承は、各地に残っている。パレスチナでは、エルサレムのハラム・アッ・シャリーフ内にあるマカーム・アル・ハディルや、ヨルダン川西岸地区のナブルス旧市街にあるアル・ハディル・モスクがその場所であるとされている（菅瀬 2012: 11）。ただし多くの場所では、まばゆい光が輝くのは過去の出来事として語られており、実際サラファンドでも、筆者が知りえた限りでは、「かつてそういうことがあったらしいが、最近はや聞いたことがない」という証言しか得ることができなかった。しかしながら、なかには近年実際にマカームが光り輝くという奇跡が最近も起こったという語りに遭遇することもあることを、言い添えておきたい¹⁴⁾。

3.2.3 1997年時のマカームと崇敬の様態

さて、筆者がサラファンドのマカームを訪れたのは、2011年が最初ではない。アウグスティノヴィッチの著作を読んでほどない、1997年4月上旬に訪問したのが最初である。

このとき、レバノン訪問自体もはじめてであり、地理にも詳しくなかった筆者は、サイダの乗合タクシー乗り場からスール行の車に乗り、「マカーム・アル・ホドルの近くになったら降ろしてほしい。ただし、自分はマカームの正確な位置を知らない」と伝えた。すると運転手は道沿いにあるから心配するなど言い、サラファンドの南端のT字路で筆者を降車させた。

マカームは前述のように、このT字路から20mほど海岸に寄った、住宅地のなかにある。現在よりも粗末な建物で、内部はやや雑然としていたが、その内部の構造は今と変わっていない。むしろ当時のほうが建物に開口部が多く、室内は明るい印象を受けた。

筆者の目を引いたのは、マカーム内に掲げられた聖ゲオルギオスの複製イコンであった。写真12は、そのイコンをとらえたものであるが、写っている壁は写真9と同じものである。シャーム地方では前述のように、イスラームの管理するマカーム・アル・ハディルに聖ゲオルギオスのイコンが奉納されるという事例は、決してめずらしいものではない。しかしながら、筆者はこのときはじめてその事例に出会ったため、サラファンドのマカームは強く印象に刻まれた。

写真撮影当時、マカーム内部には3人の男性がいた。いずれもサラファンドの住民、つまりシーア派信徒であったが、彼らは一様にキリスト教徒とのアル・ホドル崇敬の共有を肯定する意見を口にした¹⁵⁾。この場所に、近隣からキリスト教徒がしばしば参拝に来ることも、このとき彼らから得た情報である。1997年当時、サラファンドでは聖者の共有がごく当然のこととしておこなわれていたのである。

3.2.4 2011年、2012年のマカームと崇敬の様態、および1997年時からの変化

ところが2011年2月、14年ぶりにサラファンドを訪問して筆者が見出したのは、一変したマカームの様子と、聖者の共有が消滅しかかっていることを暗示する事実であった。

まず、マカームの建物自体が、建て替えにより新しくなっていた。入り口には現代的なデザインの表札が置かれ(写真13参照)、マカーム内部のアル・ホドルへの祈祷文も、以前は紙に手書きして額におさめたものであったが、大理石に彫刻をほどこし



写真 13 2011年の時点で、マカーム・アル・ホドルの入り口に置かれていた巨大な表札。「生けるアル・ホドルのマカーム」と、アラビア語で記されている。「生ける」の部分はハイイと記されており、注4における預言者エリヤ（マール・エリヤス）の呼称と共通する。2011年2月1日、レバノン・サラファンドにて撮影。

たプレート状のものに替わっていた。そのプレートの末尾には、1999年に作成されたことが明記されており、周辺住民への聞き取り調査からも、この年に大々的な改装がなされたことがあきらかになった¹⁶⁾。

大きな変化がみられたのは外観だけではなく、内部にも1997年時とは明確に異なっていた。シーア派的な特徴が、以前より格段に強くなっていたのである。その特徴は、以下のような点に明確にあらわれていた。

①マカームの入り口に置かれたモフル

入り口の目立つ場所に、シーア派しか使用しないモフルが籠に盛られて置いてあることは、前述のとおりである。ただし1997年当時、現在の場所にその存在は確認できなかった。サラファンドがシーア派の村であることは当時から変わっていないので、おそらく以前はもっと目立たぬ場所に置かれていたのではないかと推測される。

②アーシューラーの飾りつけ

当該年のアーシューラーが終了してすでにひと月以上経っていたにもかかわらず¹⁷⁾、マカーム内部のあちこちに、アーシューラーの飾りつけが取り外されることな



写真 14 マカームの回廊部分。回廊を横切ってかけられている黒い小旗には、アーシューラーの飾りつけに特徴的な、フセインの殉教を讃える文言が記されている。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。



写真 15 写真 14と同じ回廊を、一年前の2011年訪問時に撮影した写真。このときもフセインの殉教を讃える小旗が飾られていた。2011年2月1日、レバノン・サラファンドにて撮影。

く残っていた（写真 14, 15 参照）。通常、イスラームやキリスト教の祝祭で用いられた飾りつけは、クリスマスツリーなど巨大で使いまわしのきくもののほかは、その後放置されるものであるが、1997年の訪問時にはまったくみられなかった。アーシューラーはシーア派にとって、第三代イマームであるフセインの殉教を悼む最重要の宗教行事であり、人びとが行列を組んで練り歩くなど、盛大に祝われる。マカームでおこ

なわれる年に唯一の祭礼であるだけに、その飾りつけを残しておくことには、シーア派の信仰を誇るという意味もあるのではないか。

ただし、この解釈には注意も必要であろう。97年のアーシューラーは訪問時の約ひと半月後にあたっていたため¹⁸⁾、1年近く前におこなわれた前回の飾りつけはすでに劣化し、取り払われていたのかもしれない。また、サラファンドの経済状態が14年間で大きく変化したことも、現在アーシューラーの飾りつけが目立つ要因であろう。名もなき寒村というイメージであった97年当時と比較すると、観光客をあてこんだリゾート・ホテルが建設されている現在のサラファンドは、経済的に格段の躍進を遂げているのはあきらかである。経済状態にあわせてアーシューラーの規模も大きくなり、飾りつけも豪華になっているため、いつまでもマカーム内に残り目立つものになっているとも考えられる。

③アリーとフセインをはじめとした、十二イマームへの祈祷文や肖像画の出現

前に挙げた二点とは異なり、以降の三点は、サラファンドのマカームに起こった変化をより明確に物語るものである。

97年当時、マカームの北東に面した壁には、アル・ホドルへの祈祷文とともに聖ゲオルギオスの複製イコンが飾られていた。ところが2011年にはすでに取り払われており、シーア派の十二イマームを顕彰し、彼らによる神へのとりなしを願う祈祷文に取って代わられていた。また、アル・ホドルへの祈祷文の上には初代イマームであるアリーの肖像画が掛けられており(写真10参照)、この肖像画は参詣者が願をかけるシャンデリアのうちの一基と、ほぼ相対している。もう一基のシャンデリアに願をかけるときにも、ちょうど眼に触れる位置にあることがわかる。つまり、なんの知識もなくサラファンドのマカームを訪れた者の眼からみれば、ここがアル・ホドルのマカームであることを印象づけるものはきわめて少なく、むしろ十二イマームたち、とりわけアリーとフセインに捧げられた礼拝所であるという印象を受ける。14年前と比較すると、マカームはシーア派色をより前面に押し出しているのである。

筆者は2011年2月、この変化を如実に物語る出来事に遭遇した。マカーム内に入ると、そこには若い女性がひとりおり、熱心に祈りを捧げていた。しかしながら、アル・ホドルに願をかけているというよりは、キブラに向かって額づく通常のイスラームの礼拝のようにみえた。

立ち去ろうとする女性を呼び止め、ここはアル・ホドルのマカームかと尋ねたところ、彼女はここはアル・ホドルではなく、フセインのマカームであると答えた。筆者

はこれに対し、そんなはずはない、ここはアル・ホドルのマカームのはずだと返し、さらに1997年にここへ来たこと、かつては壁に聖ゲオルギオスのイコンがかかっていたことを述べ、そのイコンがどこにいったのか知らないかと尋ねた。またあわせて、壁にかかっている十二イマームへの祈祷文を指さして、ここに「ズィヤーラ」と書いてあるが、彼らがここに来たのかと尋ねた。ズィヤーラとは直訳すれば来訪を意味するため、筆者はこのマカームに、十二イマームが来たという伝承が残っているのかもしれないと考えたのである。

ところが、この筆者の質問が気に障ったらしく、女性は烈火のごとく怒りだした。そして、そんなことは知らないし、第一ここにイコンなどがあるはずもない、なぜならここはフセインのマカームで、フセインの「ズィヤーラ」が掲げられている場所なのだからと訴えた。筆者は女性ともっと冷静に話したいと思ったが、とてもそのような状態ではなく、やむなく彼女と話すことをあきらめざるをえなかった(菅瀬2012:38)。

実は、このような事態になってしまった原因の一端は、筆者の思い違いにあった。「ズィヤーラ」とは来訪という意味ではなく、神へのとりなしを意味するのである。キリスト教徒をおもな調査対象としてきた筆者はこの意味を知らなかったため、女性にとってはマカームに出入りする者として当然心得おくべきことを知らない、不躰な部外者とうつつたのであろう。ただし、この女性の反応もまた、過敏なものであったようである。2012年1月から2月にかけて再訪したとき、筆者はこのときの話のマカーム管理人の女性に語ってみせた。すると彼女は、そんなことを言うとはおかしい、すこし常軌を逸した人物だったのではないかと言った。そもそも、このマカームがアル・ホドルのものであることは非常に有名であり、村の住民であれば間違えるはずもないという。もしかしたら、別の村からの移住者なのかもしれないと筆者が言うと、それもありえない、サラファンドに移民が来るなど、聞いたことがないと彼女は返した¹⁹⁾。サラファンドに、レバノンの他地域からの集団的な移住者がいないことは、村役場でも確認済みである²⁰⁾。

このように、2011年に筆者が遭遇した事例は、会話の発端から誤解が入り混じったものであり、互いに冷静さを欠いていたため、かなり特殊なものであるということができよう。しかしながら、アリーヤフセインをはじめとした十二イマームへの祈祷文があらたに出現し、本来は偶像崇拜をかたく禁じているはずのイスラームのモスクにおいて、肖像画が飾られるという事実は、サラファンドのマカームがよりシリア派色を強めているという証拠といえる。

④聖ゲオルギオスの複製イコンの移動と、認知度の低下

実は取り払われていたとばかり筆者が思っていた聖ゲオルギオスのイコンは、マカーム内の別の場所に移動していた。2011年の訪問で、マカーム内の女性と口論になりかけて調査を断念した筆者は、この事実を翌年、2012年の調査時に確認した。

マカーム内は1997年当時と比較すると、やや薄暗くなっている。このため2011年の訪問時には気が付かなかったが、イコンは現在もマカーム内部に掲げられていた。現在の場所は、かつて掲げられていた北東の壁の向かいにあたる南西側で、床から2mほどのところにあるため、参拝者の視界には入りづらい。また、マカーム内部からみるとちょうど逆光にあたり、この場所をはじめて訪れた者や、幾度か訪れたことはあってもあまり内部を知らない者、マカームの内装に興味のない者が、その存在に気付くことはきわめて難しい。また、イコンの存在は周知されているものの、現在も掲げられていることを知る者は、マカーム管理人の女性以外にはいなかった。移動されたのはおそらく1999年の改築時であるが、誰が移動させたのかについても、すでにわからなくなっている。目立たない場所に置かれることによって、イコンの認知度は急激に低下したものと考えられる。

⑤ヒズブラーのプロパガンダ冊子やポスターの掲示

1997年には一切みられなかった、シリア派武装政党ヒズブラーのプロパガンダ冊子やポスターが、あちこちに置かれていた(写真16参照)。いっぽう、後述するサ



写真16 マカーム・アル・ホドル内に掲げられたヒズブラーのプロパガンダ。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。



写真 17 マカーム・アバー・ザッル内に掲げられたアマルのロゴ。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。

ラファンドに現存するもうひとつの聖者崇敬のマカームには、同じくシーア派武装政党であるアマルの看板やポスター、冊子が置かれていた（写真 17 参照）。

3.2.5 シーア派化するアル・ホドル崇敬と、非サラファンド住民による批判

以上で挙げたように、サラファンドのマカーム・アル・ホドルは 1999 年の改築を経て、大きく変化している。また、その変化のいずれもが、マカームにおけるシーア派色の鮮明化を物語るものであった。それに従い、本来マカームに祀られているはずのアル・ホドルは影が薄くなり、代わりにアリーやフセインといった、シーア派の重要人物への崇敬に取って代わられてすらいるようである。③と④の事例は、その傾向を端的に語るものである。

サラファンドの住民に、アル・ホドルはシーア派でどのような位置づけにある聖者であるのか尋ねてみたところ、彼らは 3.1 で触れたクルアーンの「洞窟の章」に登場する、ムーサーとのエピソードを語ったうえで、さらにシーア派のみに伝わるアル・ハディル像を述べた。彼らによれば、アル・ホドルはアリーこそをムハンマドの後継者とみなしたという。この語りはサラファンドにおけるアル・ホドル崇敬のありかたを考察する上で、非常に重要である。つまり、アル・ホドルはシーア派の正統性を擁護する聖者であると定義づけられているのである²¹⁾。この語りは、1997 年時にはまったく聞かれなかった。

では、いかにしてこのような言説が発生したのか。イスラームでは、ムハンマドの

教を正しく継承することが正統とみなされ、その後継者を誰とみなすかの意見の相違によって、ムハンマドの娘婿であるアリーとその子孫を後継者とみなすシーア派と、それ以外のスンナ派に分裂した。しかしながら、現在中東の多くの地域ではスンナ派が正統であり、シーア派は異端とみなされている。これは中東全体でみればシーア派が少数派であるからにはかならない。

中東では宗教と親族関係は密接に結びついており、アイデンティティの根幹をなすものである。つまり、中東における正統／異端の議論は、その地域で多数派に属するか否かで決まる。このことを念頭に置けば、シーア派が多数派を占めるサラファンドを含めたレバノン南部では、中東のほかの地域とは異なり、シーア派こそが正統の地位を獲得していることは自明の理である。シーア派の村であるサラファンド内部ではいうまでもない。それだけに、村の外に一步出ればスンナ派信徒が存在し、レバノン全体をみればあきらかにスンナ派が権力を握っている現状では、シーア派は依然として少数派であり異端である。そのようにみなされることは、サラファンドのシーア派信徒にとっては耐え難い屈辱である。

このような状況において、イスラーム圏でひろく崇敬されるアル・ホドルがシーア派の正統性を擁護する存在であるとすれば、それは彼らにとって非常に喜ばしく、心強い。また、スンナ派と並んでキリスト教徒が権力を握るレバノンにおいて、キリスト教徒にも崇敬されるアル・ホドルがシーア派の正統性を保証することは、重要な意味を持つ。アル・ホドルとシーア派の正統性を結びつける言説は、このような意図のもとに発生したのではないだろうか。

ただしこの言説は、シーア派住民にとってのアル・ホドルの重要性を裏付けると同時に、彼らの間で、アル・ホドルをシーア派の聖者として占有しようとする意思が働いていることも示唆している。本来、アル・ホドル崇敬はスンナ派やキリスト教徒、ドルーズ、さらにはかつて居住していたユダヤ教徒と共有されていたはずであるが、サラファンドではシーア派の正統性を擁護する存在とみなされることでシーア派に占有され、それに伴い非シーア派信徒にも崇敬が共有されるという、アル・ホドル崇敬ならではの特色が失われつつある。しかもその変化は、1997年以降、10年あまりの間に急激に起こったものと考えられる。

さまざまな宗教・教派信徒が混在するレバノン南部だけに、この変化はすでにシーア派以外の人びとの間にも伝わり、批判が囁かれている。その不穏な現状を象徴するのが、2011年の訪問時に、筆者が乗ったタクシーの運転手の反応であった。

当時、長引く政情不安定によりレバノン市民は外出を控える傾向にあり、乗合タク

シーがほとんど走っていなかったため、筆者はやむなくバイルートからタクシーをチャーターすることになった。ところが、サラファンドに行きたいと告げると、運転手は突然渋りはじめた。彼はマカームの存在をもちろん知っていたが、行ってもなにもないし、つまらないと言う。さらに、筆者が中東のキリスト教徒について調べていると知ると、サラファンドにほど近いキリスト教徒村マグドゥーシェにある塔²²⁾や、南部の村カーナにある洞窟²³⁾などのほうがずっとためになるだろうと力説し、なんとか筆者を引き留めようとした。それでも筆者がなおも頼むと、運転手はようやく観念し、サラファンドに筆者を連れて行った。

ところがサラファンドに着いて、一時間ほど待っていてほしいと言っても、彼は決して車から降りず、道を尋ねるほかは、サラファンドの住民と口をきこうともしなかった。その態度からは、長居したくないという強い意志がはっきりと感じられた。その後、前述のとおり女性と口論になりかけた筆者が車に戻り、マカームで遭遇した出来事について語ると、憤懣やるかなたいという様子で以下のように話しはじめた。

あの場所は、おれたちみたいな周辺に住むムスリムだけじゃなくて、山の奥のほうに住むキリスト教徒たちにも有名なマカームだったんだ。なのにそんなふうには、『フセインのマカーム』だなんて言われたら、おれたちは行くのをためらってしまうじゃないか。キリスト教徒にはもちろん、おれたちスンナ派にとっても、フセインなんて別に聖者でもない。あいつらはおれたちに来てほしくないんだ。アル・ホドルはみんなの聖者だ、そうだろう？ 彼の聖所は、みんなに開放されてしかるべきだ。なのにみんなの聖所を独占するなんて、ムスリムのやることか？ だからシーア派は間違ってるんだ！²⁴⁾

この運転手は、サイダ出身のスンナ派ムスリムであった。彼は南部におけるシーア派の勢力拡大を嘆き、そのためにスンナ派やキリスト教徒の肩身がどんどん狭くなり、関係も悪化していると口をきわめて批判した。

彼は「スンナ派にとって、フセインは聖者ではない」と言っているが、これは厳密には誤りである。しかしながら彼の語りからは、スンナ派信徒にとってアリーやフセインがすでに「シーア派が占有する聖者」として記号化され、敬遠されているという事実を導き出すことができる。ただし前述のように、サラファンドのマカームが「フセインのマカーム」であるというのは女性の誤解、あるいは筆者と口論になった彼女が激高したあまり口にした言い間違いであるため、このときの運転手の発言は筆者の伝えた誤った情報に影響を受けていることはあきらかである。とはいえ、筆者の語った内容が呼び水となって、いつもは口にしないシーア派に対する不満が噴出してしまったことは事実であろう。

2012年の調査時、筆者はサイダで20名ほどのスナ派ムスリムとメルキト派カトリック信徒に、シーア派についてどう思うかと尋ねたところ、彼らは全員否定的な見解を述べ、サイダもスールのようにシーア派が多数派の街になってしまうのではないかと、日々脅威を感じていると語った。また、キリスト教徒には重点的に、サラファンドのマカーム・アル・ホドルの存在を知っているか否か、そこに詣でた経験があるか否かについて尋ねたが、彼らは一様に、マカーム自体の存在は高名であるから知っているが、詣でたことはないと答え、その理由としてサラファンドがシーア派の村であることを挙げた。このように、サラファンドのアル・ホドル崇敬はかつてのように、シーア派である村民と非シーア派である非村民に共有されるものではなく、シーア派の村民のみに占有されるものとなっている。それと同時に、アル・ホドルがシーア派の正統性を保証する聖者として、シーア派の聖者として書き換えられているという現象も起きているのである。

4 聖者の共有から占有への移行が意味するもの

さて、前章の内容からあきらかになったサラファンドにおけるアル・ホドル崇敬の特徴は、以下のとおりである。

- a. アル・ホドルへの聖者崇敬は存続しているが、シーア派の正統化の文脈において重要視されている。
- b. キリスト教徒やスナ派と共有する聖者であるという認識は存在するが、パレスチナと比較すると、共有は重視されていない。キリスト教徒やスナ派は、すでにサラファンドのマカームへ参拝することを自粛しており、事実上聖者の共有は消滅しかかっている。
- c. アル・ホドルに捧げられたマカームであるにもかかわらず、彼の存在は希薄であり、むしろアリーヤフセインといったシーア派の聖者にとって変わられつつある。

この内容をふまえ、次章ではサラファンドにおける聖者アル・ホドルの特徴を、歴史的パレスチナを中心としたシャーム地方のアル・ハディル崇敬との比較から分析してゆきたい。

4.1 パレスチナにおけるアル・ハディル崇敬とサラファンドにおけるアル・ホドル崇敬の比較

4.1.1 アル・ハディルの一般的役割

まずは中東・イスラーム世界一般におけるアル・ハディル崇敬において、簡単にまとめておきたい。聖者アル・ハディルが聖者崇敬において担っている役割は、以下の三点である。

- ①航海と漁業の守護者
- ②農耕と豊穡の守護者
- ③郷土の英雄

このうち、①はクルアーン「洞窟の章」やハディースの記述に基いており、イスラーム世界全般に流布しているアル・ハディル像である。アル・ハディルを海と関連付けて崇敬するのは、イスラームの特徴といえる。イスラーム世界に居住する非ムスリムのうち、海に近い地域に住むキリスト教徒にも同様の傾向がみられるが、ごく一部でみられる事例にとどまっている。

いっぽう、パレスチナを中心としたシャーム地方でひろくみられ、ことにキリスト教徒の間で流布しているのが、②である。農耕と豊穡の守護者としてのアル・ハディルは、常に農業と深く結びついており、ことにシャーム地方が属する地中海性気候においておもに栽培されている、小麦とオリーブの栽培サイクルをもとにした農耕暦と密接なかかわりと持っている。農業のさかんなこの地において、農業は大なり小なり、この地に生きるすべての人びとの生活に影響をおよぼしているといっても過言ではない。シャーム地方において、アル・ハディル崇敬が宗教・教派の違いをこえて、すべての人びとに共有されるという現象がみられるのは、このためである。聖者の共有が顕著にみられる聖ゲオルギオス祭、預言者エリヤ祭、リッダ祭といった、アル・ハディルの祝祭はすべて農作業の区切りとなる時期におこなわれ、収穫祭や豊作祈願祭という一面をそなえているのは、すでに述べたとおりである。また、アル・ハディルの祝祭と農作業を結びつけた農耕暦には、東方正教の暦の影響が色濃くみられる。

③もまた、パレスチナにおけるアル・ハディル像を特徴づける役割である。ムスリムであろうとキリスト教徒であろうと、パレスチナで生まれ育った者にとって、アル・ハディルはバツレヘム近郊の村にそのルーツの一端を持った先祖であり、パレス

チナで殉教した地元の英雄である。パレスチナの英雄としてのアル・ハディルは、ときにイスラエルの占領政策に対する抵抗や、失われた過去のパレスチナの歴史や文化の象徴ともなりうる。ヨーロッパには伝わっていない「パレスチナ出身の母を持つ」という伝承は、ある意味聖者の占有であるとも解釈できるが、②としての性格も併せ持つことによって、アル・ホドル崇敬はパレスチナ以外のシャーム地方全域にも共有されるものとなっている。また、パレスチナに限らず、アル・ハディルのマカームが存在する場所では、アル・ハディルの奇跡譚がその土地と関連付けて語られることが多い。たとえば、シリア南部にはアル・ハディルの墓所、あるいは滞在した場所であるとされるマカームが数か所みられ、それぞれの場所では実際にアル・ハディルがその場所にいたと信じられている（菅瀬 2012: 40-43）。

以上の点をまとめると、パレスチナにおけるアル・ハディル崇敬の役割で、重要なのは②と③である。宗教・教派を超えて、アル・ハディル崇敬が共有される理由も、豊穣を司るという点と郷土に根差すというアイデンティティを象徴する点に根差しているといえる。

4.1.2 豊穣と郷土とのかかわりの欠落

ところが、サラファンドにおけるアル・ホドル崇敬において、もっとも強いのはむしろ①としての役割である。サラファンドは海洋民族フェニキア人の集落として誕生し、現在も漁業がさかんな村であることから、これは当然といえる。しかしながら②は部分的、③に至ってはまったくその要素は有していない。アウグスティノヴィッチによれば、このマカームは当初預言者エリヤとしてのアル・ホドルによる治癒の奇跡の場所として崇敬を受けはじめたので（Augustinović 1972: 37）、②の要素を持つことは当然と思える。しかしながら、現在サラファンドでアル・ホドル崇敬に顕著であるのは子宝祈願であり、パレスチナで顕著にみられる農耕とのかかわりにおける豊穣、つまり降雨や豊作を祈願するという要素はみられない。パレスチナやシャーム地方との比較において、サラファンドのアル・ホドル崇敬には、豊穣と郷土とのかかわりが欠如しているのである。

このうち、豊穣とのかかわりが欠如している理由は、パレスチナとサラファンドの自然環境と農業のありかたの相違に求めることができよう。パレスチナではオリーブや小麦など、播種や収穫の時期が決まっており、季節のうつろいとともな農作業がおこなわれる作物が作られており、アル・ハディルの祭はその農作業の区切りにおこなわれる豊作祈願祭や収穫祭の役割を帯びている。しかしながら、サラファンドでおも

に栽培されているのは、年間をとおして収穫できるバナナである。農作業の区切りにおこなわれる祭は重要ではなく、事実サラファンドでおこなわれる祭は、季節の変遷や農業とは関係のない、ヒジュラ暦に基づいておこなわれるアーシューラーのみである。また、パレスチナのような農耕暦の存在はサラファンドでは確認できなかった。

豊穡と郷土とのかわりこそは、パレスチナにおいて聖者アル・ハディル崇敬が共有される最たる理由である。それだけに、パレスチナの文脈でいえば、サラファンドで聖者の共有が失われつつあるのは至極当然の事象といえよう。しかしながら、かつてサラファンドでも聖者の共有がおこなわれていたことは事実であり、郷土とのかわりが欠落した状態でも聖者の共有が可能であったことがわかる。

実は、サラファンドにはアル・ホドルのほかにもうひとり、崇敬されている聖者がいる。レバノン南部にイスラーム、すなわちシーア派をもたらしたアバー・ザッルこそがその聖者であり、郷土の英雄としての役割は、彼が担っているのである。

4.2 サラファンドにおけるアバー・ザッル崇敬

4.2.1 アバー・ザッルについて

アバー・ザッルは前述のようにムハンマドの教友のひとりであり、シーア派にとっては非常に重要な人物である。小さな貧しい部族の出身だった彼は、もっとも初期のうちにイスラームに帰依し、その実直な性格から、ムハンマドに深く信頼された。また、謙虚な人柄をしのばせる逸話も残されている。ムハンマドは彼の克己心と敬虔さを“マリヤムの息子イーサー”、すなわちイスラームでも重要な預言者のひとりともみなされるイエスにたとえて賞賛したと、シーア派の人びとは信じている。ところが、預言者の死後アリーに従い、第3代カリフ・ウスマーンの金権体質や身内びいきを批判したことにより、アバー・ザッルはウスマーンやシリア総督ムアーウィヤと対立することになる。最終的に彼はウスマーンによって追放され、非業の最期を遂げた²⁵⁾。

サラファンドでアバー・ザッルが熱心に崇敬されるのは、もちろん彼がシーア派において、重要な人物とみなされているためである。その人となりや悲劇的な死も、彼が人気を集める要因のひとつであろう。しかしながら、アリーをはじめとした村人たちの語りで強調されていたのは、むしろ彼自身がサラファンドの歴史に深くかかわる人物であるという点であった。アバー・ザッルは当初からシャーム地方と縁が深く、熱心に布教活動をおこなっていた。ムアーウィヤと対立関係にあったのも、ウスマーン批判をめぐる見解の違いだけではなく、シャーム地方における彼の影響力をムアーウィヤが警戒してのことである。アバー・ザッルとムアーウィヤのどちらがより

シャーム地方と強固な関係を築いていたかといえば、おそらくそれは圧倒的に前者のほうであったろう。ムアーウィヤがシリア総督になったのは預言者の死後であるが、アバー・ザッルはヒジュラの時期にすでにシャーム地方に基盤を築いていたのである。

アバー・ザッルはあるときレバノン南部を訪れ、海に面し、高い丘を擁するサラファンドの地理的特質に目をとめた。周囲を一望のもとに見渡せると同時に、港をも擁するサラファンドを、レバノン南部における活動の中心地と定めたという。このため、サラファンドの人びとはアバー・ザッルを郷土の英雄とあがめている²⁶⁾。彼らがアバー・ザッルに対して抱く敬意は、ベツレヘム近郊出身の母を持ち、自身も幼年時代をそこで送り、リッダで殉教したと伝えられる聖ゲオルギオスとしてのアル・ハディルに対して、パレスチナ人が抱くそれと非常に似通っているといえる。

ところで、ムハンマドの教友である以上、アバー・ザッルはスンナ派にとっても重要な存在であるはずである。実際、ハディースにも彼についての記述は多い。ところが、アラー派に属しウスマーンやムアーウィヤと対立したという経歴ゆえか、スンナ派では彼はほとんど注目されることがない。たとえば、同様に聖者崇敬がさかんなパレスチナ北部のガリラヤ地方に、マカーム・アバー・ザッルはひとつもない（Arrāf 1993）。レバノンと境界を接し、古くはレバノン南部と歴史的・文化的背景を共有してきたガリラヤ地方には、前述のように1948年まではシーア派の住民が居住していた。にもかかわらず、ナクバによる破壊村にもその痕跡がないという事実から、この地域でアバー・ザッル崇敬がまったくさかんではなかったということがわかる。また、レバノン南部で同じくシーア派の一大拠点となっているベカー高原でも、彼の名をきいたことはなかった。彼はレバノン南部のシーア派に限定された聖者であるということができよう。

4.2.2 サラファンドのマカーム・アバー・ザッルと崇敬の様態

マカーム・アバー・ザッルは、レバノン南部の各地に点在する。南部最大の都市サイダにも、港の近くに小さなマカーム・アバー・ザッルがあり、崇敬を受けている。前項で触れたように、アバー・ザッル崇敬はレバノン南部のシーア派独特のものであるので、シーア派住民のいない地域、たとえばパレスチナ・イスラエルなどでアバー・ザッルのマカームを見かけることはない。

約900年前に建立されたといわれるサラファンドのマカーム・アバー・ザッルは、丘のほぼ頂上付近に位置する（al-Rīs 2009: 25）。このため眺望がすばらしく、サラ



写真 18 マカーム・アバー・ザッルより、サラファンドの沿海部を望む。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。



写真 19 マカーム・アバー・ザッル内の井戸。願掛けに使われた数珠や個人の写真がいくつかかけられている。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。



写真 20 マカーム・アバー・ザッル内の額。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。



写真 21 マカーム・アバー・ザッルの内部。2012年1月31日、レバノン・サラファンドにて撮影。

ファンドとその周辺が見渡せる（写真 18 参照）。このマカームを訪れることによって、サラファンドの重要性を見出したアバー・ザッルの視点を追体験できるのである。ドームをそなえ、入念に手入れされた石造りの建物の内部は二部屋に分かれ、そのうち小さい部屋が礼拝のための部屋となっている。大きな部屋には椅子などが置かれ、礼拝に来た者が歓談できるスペースが設けられており、礼拝前に身を清めるための井戸もある（写真 19 参照）。井戸の横に数段の石段があり、それを上るとキブラのついた礼拝のための小さい部屋がある。この部屋の入口には、「偉大なる教友、アバー・

ザッル・アル・ギファーリーのマカーム (maqām al-Sihābī al-Jalīl Abā Dharru al-Gifārī, مقام الصحابي الجليل أبي ذر الغفاري)」と記された額がかかり (写真 20 参照), 中には礼拝用の絨毯が常時床に広げられ, 頻繁に人びとが礼拝に訪れ, なおかつ清潔に保たれているさまがうかがえた (写真 21 参照)。ただしここには, マカーム・アル・ホドルほど願掛けの痕跡はみられない。写真 19 の井戸に, わずかに数珠や写真がかけられているのが確認できるが, 聖者崇敬の願掛けでもっとも特徴的な, 緑の布はいっさいみられなかった。周辺住民に確認したところ, この場所で願掛け行為がおこなわれることはすくなく, 参拝の目的は一日 5 回の礼拝にほぼ限られるとのことであった²⁷⁾。ここでの願掛けに, 礼拝の道具である数珠のみが使われ, 民間信仰的色彩の強い緑の布がもちられないという事実は, 礼拝所として機能するこの場所と, 願掛けの場であるマカーム・アル・ホドルの性格の差異を象徴的に示しているといえよう。また, アバー・ザッルはイラン革命時, 革命的人間の典型として紹介され, 革命に参加した人びとの情熱の源泉となったというが, サラファンドでの聞き取りでは彼とイスラーム革命を関連づける言説は一切聞かれなかった。アバー・ザッルはあくまでサラファンドと南部レバノンという限定的な土地に住む, シーア派のみを守る聖者として崇敬されているのである。

4.3 アル・ホドルとアバー・ザッルの役割分担

聖者は集落, 共同体の守護者として祀られるが, サラファンドにアル・ホドルとアバー・ザッルという 2 名の聖者が存在することには, 意味がある。彼らはサラファンドという村のなかで, 守護者としての役割を分担しているのである。

2012 年の調査時, 筆者はマカーム・アル・ホドルの歴史を知る者がいないか尋ねるために, まずサラファンドの村役場に向かった。そこで村役場の職員 5 名と, 偶然その場にいた警官 2 名, 村民 2 名とアル・ホドル崇敬について話す機会を得た。このとき彼らは筆者がアル・ホドルのことばかり尋ねるのをいぶかり, なぜアバー・ザッルのマカームを訪れないのかと逆に問うてきた。彼らが口を揃えて主張するには, 「このあたりで聖者といえば, それはアバー・ザッルのこと」であるという。マカーム・アル・ホドルについて, 歴史が古いので名前は知っているものの, 一度も訪れたことはないと彼らは語った。彼らはいずれも丘陵部に生まれ育っており, 沿海部を訪れることも, そこに住む人びとと接触する機会もほとんどない。また, 断食や一日 5 回の礼拝など, ムスリムとしての当然の義務は果たすものの, 宗教的に特別熱心という訳ではないとのことであった。実際, 彼らの服装はいずれも洋装であり, うちひと

りは女性であったが、ヒジャーブも身に着けていなかった。

しかしながら同日午後、沿海部へと徒歩で下り、マカームの周囲に住む人びとと話をしてみたところ、彼らは一様にアル・ホドルこそこの村の聖者であると語った。彼らの生活にどれほどアル・ホドル崇敬が浸透しているのかは、通りを埋め尽くす商店や個人病院、弁護士事務所などの看板に、ホドルという名を持つ者が多いことでもわかる。彼らの生活もまた沿海部のみで展開されており、丘陵部に足を運ぶこともなければ、そこに住む人びとと接触する機会もないとのことであった。当然、マカーム・アバー・ザッルを訪れたこともない。

サラファンドの2つの聖者崇敬から読み取れることは、二点ある。すなわち、この村が沿海部と丘陵部に分かれ、それぞれ独立した生活圏を形成しているということ。もう一点は、沿海部と丘陵部各々の性格が、その地域での聖者崇敬にも反映されているということである。フェニキア時代にその起源をさかのぼるサラファンドの歴史をひもとけば、この村がまず沿海部から開けたことはあきらかである。サイダとスールという、レバノン南部を代表する二都市の間に位置し、両者を結ぶ街道沿いに位置するうえ、海に面したサラファンドは、その交通の利便性から徐々に拡大し、丘陵部へと拡張していった。やがて7世紀中葉、アバー・ザッルによるイスラーム化の際に要衝として注目を浴びたことによって、サラファンドの中心は沿海部から丘陵部へと移ってゆく。現在、村役場が丘陵部の頂点部分に位置するのは、象徴的である。

沿海部と丘陵部の性格には、あきらかな差異がみられる。現在も街道に面した沿海部は、往来する人びとと頻繁に接触する機会がある。いっぽう、街道から隔たった丘陵部は、完全にシーア派住民のみの世界として完結している。村外から来た者と一切接触することなく、日常生活が成立する場所なのである。この沿海部と丘陵部の相違は、それぞれに祀られるアル・ホドルとアバー・ザッルへの崇敬のありかたと同様の性質を帯びているのである。

すでに述べてきたように、アル・ホドルは基本的にイスラームの聖者であり、サラファンドではシーア派の正統性を保証する聖者とみなされているが、聖ゲオルギオスや預言者エリヤと同一視されるがゆえに、シャーム地方全体では「ムスリムも崇敬するが、どちらかといえばキリスト教徒が好む聖者」であると認識されている。いっぽう、アバー・ザッルはレバノン南部のシーア派に限定された聖者である。このため、マカーム・アル・ホドルには村外からの参拝者、ことにキリスト教徒が訪れることはあっても、マカーム・アバー・ザッルにサラファンドの住民以外、つまりレバノン南部出身のシーア派信徒ではない者が訪れることはまれである。ゆえに、さまざまな人

びとが行き交う沿海部で、シーア派以外のムスリムにも共有されてきたアル・ホドルが崇敬され、純然たるシーア派の集落である丘陵部では、シーア派の聖者であるアバー・ザッルが崇敬されるのは、ごく当然の帰結といえる。

4.4 郷土に根ざすアイデンティティのゆくえ

すでに幾度も述べているように、パレスチナにおいてアル・ハディル崇敬が共有されるのは、農耕・豊穡と郷土とのかかわりという、宗教・教派を超えた二つの要素ゆえであった。しかしながら、サラファンドのアル・ホドル崇敬にはそのいずれもが欠落しており、代わりに郷土の英雄としての役割を担っているのは、もうひとりの聖者であるアバー・ザッルであった。

アバー・ザッル崇敬は他の土地ではみられず、サラファンドにおけるアバー・ザッルの語りは、必ずシーア派の土地としてのサラファンドおよびレバノン南部と結びつけられている。これらのことから、彼が「レバノン南部に根ざすシーア派信徒」のアイデンティティを鼓舞する存在として崇敬されていることが読み取れる。聖者崇敬の定義を本論文の最初に述べたように「願掛けを伴うもの」とするのであれば、アバー・ザッル崇敬は聖者崇敬としてはやや弱い。しかしながら、「レバノン南部に根ざすシーア派信徒」というアイデンティティを象徴し、鼓舞するものとして崇敬されるさまは、パレスチナにおけるアル・ハディル崇敬と酷似している。

アバー・ザッルがシーア派の拠点としてのサラファンドの重要性を認めた、すなわちサラファンドをシーア派の文脈で価値ある存在とした人物であることは、この地におけるアル・ホドル崇敬を考察する上でも、非常に重要である。前述のように、サラファンドは丘陵部と沿海部に二分されており、アバー・ザッル崇敬はシーア派住民しかいない前者で、アル・ホドル崇敬は村外から往来する非シーア派信徒と接触する機会の多い、かつてはキリスト教徒の集落として知られていた後者でさかんにおこなわれている。アバー・ザッル崇敬が、シーア派の村としてのサラファンドを象徴するものであるいっぽう、アル・ホドル崇敬はイスラーム以前からの歴史を持ち、さまざまな宗教・教派に属する人びとが混住してきたシャーム地方の一集落としてのサラファンドを象徴するものといえる。ところが今日、キリスト教徒やスンナ派と共有されてきたアル・ホドルは、村民によってシーア派の正統性を認める聖者であると強調されるようになり、彼を祀るマカームではキリスト教徒との共有を象徴する複製アイコンが目立つ場所から撤去された。その代わりに置かれたのがアリーの肖像であり、アル・ホドルよりもアリーやフセインといったシーア派独特のイマームたちへの祈願文が目

立つようになっている。これまではアバー・ザッル崇敬のみで満たされてきたシーア派信徒としての宗教的アイデンティティが、多様な宗教・教派が共存するシャーム地方に根ざすアイデンティティを凌駕しはじめたのである。

この現象が、1990年代末からみられるようになったことは象徴的である。サラファンドのマカーム・アル・ホドルが改装されたのは1999年であるが、翌2000年、レバノン・イスラエル間の国境付近を長期占領していたイスラエル軍が撤退した。これを契機に、イスラエル軍と戦闘状態にあったヒズブッラーは、勝利宣言をおこなうとともに、さらなるイスラエルとの闘争継続（正確には、イスラエル政府とレバノン政府が帰属を争う国境付近の「解放」など）を宣言した。この年後半、パレスチナ自治区だけではなくイスラエルのアラブ人市民が多く居住するガリラヤ地方にも飛び火したアル・アクサー・インティファダとも連動し、ヒズブッラーはしばしばイスラエル側にロケット弾を撃ち込んでいる。また、2006年にはイスラエル軍とヒズブッラー間で第二次レバノン戦争が勃発し、ヒズブッラー殲滅という目標を果たすことなくイスラエル軍が攻撃を中止したため、ヒズブッラーは勝利を宣言した。2000年代はまさに、ヒズブッラーがレバノンの政局に大きな影響を及ぼし、シーア派レバノン市民の宗教的アイデンティティ鼓舞に大きな役割を果たした時代であった。

宗教施設は、ヒズブッラーのプロパガンダ宣伝の一大拠点となりうる。マカーム・アル・ホドルにはヒズブッラーのビラや機関誌が数多く置かれ、支持者が多く集うことがうかがえた。このような世相のなかで、一神教徒すべてに共有されるアル・ホドルの存在は、シーア派を正統化する聖者とあらたに定義されるようになったと考えられる。サラファンドのマカーム・アル・ホドルは、すでにキリスト教徒やスンナ派信徒にも開放されていたアル・ホドル崇敬の聖所としての特徴を失い、シーア派のみに限定される礼拝所に変貌しつつあるのである。

5 むすび

本論文の目的は、サラファンドにおける聖者アル・ホドル崇敬の変化とパレスチナにおける聖者アル・ハディル崇敬との比較から、シャーム地方で本来培われてきた一神教徒の共存状態が、レバノン南部で失われつつある現状を報告することであった。その背景には、イスラエル軍のレバノン南部撤退にともなうシーア派の宗教的アイデンティティの昂揚があった。

しかしながらシーア派の台頭は、レバノンの商業・政治の中心を握るキリスト教徒

やスンナ派による警戒をますます強め、シーア派と非シーア派の距離を広げているように見える。論文中で紹介した、聖者の占有に対するスンナ派ムスリムによる批判は、その一例である。現在隣国シリアが内戦状態に陥り、キリスト教徒をはじめとしたマイノリティに対する攻撃が日々報道され、さらにはヒズブッラーがこの内戦に介入しているという事実は、シーア派と非シーア派の不和をさらに増大させる要因になるであろう。

2013年2月、筆者はその実例をイスラエルで目にするようになった。ガリラヤ地方における別の調査中に、筆者はヒズブッラーの広報衛星TV局であるアル・マナール局で、党首のハサン・ナスラッラーによる演説を視聴した。折からのシリア内戦と「アラブの春」を受け、ナスラッラーは宗派主義に支配されたレバノンの選挙制度に対する疑問を提示し、しきりとシーア派とスンナ派、キリスト教徒諸派の協力の必要性を訴えた。ヒズブッラーはイスラエルのアラブ人市民、それもキリスト教徒に高い人気を誇るが、その理由はこの演説にもあらわれているように、彼が宗教・教派間対立の危険性を認め、そのことに危惧を抱く姿勢をことあるごとに示すためである。イスラーム主義過激派が各地で勃興するなか、このように他の宗教・教派に対する気遣いを見せる宗教的・政治的指導者は珍しい。この演説に、レバノン国内のみならず、周辺国へも影響力を拡大してゆこうとするナスラッラーの政治的意図が隠れているとしても、シャーム地方で維持されてきた複数宗教・教派信徒の共存が危機を迎えているという認識を、多くの人びとが持っているという事実を反映していることはあきらかである。聖者の共有は、その共存を維持するための慣習であり、聖者が占有されることは共存状態そのものの崩壊につながりかねないのである。

サラファンドのマカーム・アル・ホドルに、かつてのようにキリスト教徒やスンナ派の参詣者が戻ることは、現在は困難であろうことが予測される。しかしながら、シーア派の住民たちの間では、アル・ホドルはシーア派を正統化する聖者であると同時に、やはりキリスト教徒やスンナ派と共有する聖者であるという語りは、いまだに生きているのも事実である。その語りが、将来また非シーア派の参詣者を呼び戻す可能性は残されているであろう。

謝 辞

本論文は、総合研究大学院大学学融合推進センターによる女性研究者支援「東地中海地域の聖者信仰にみる、一神教徒の共存の様態についての人類的研究（平成22年）」、および科学研究費基盤研究（A）「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト（代表：西尾哲夫、平

成 24～26 年) による研究成果の一部である。また、内容の一部は日本文化人類学会第 46 回研究大会における分科会発表「映像にみるイスラーム的宗教実践—地域間比較研究における「家族的類似」概念の可能性をめぐって(平成 24 年)」, 国立民族学博物館の共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相—中東・ヨーロッパを中心に—(代表: 山中由里子, 平成 22～25 年)」における発表の内容を改稿・増補したものである。西尾哲夫先生, 山中由里子先生や研究会メンバー諸氏, 分科会メンバーの吉本康子氏と阿良田麻里子氏, 黒田賢治氏をはじめ, 多くの方がたにコメントをいただいた。ここに感謝の意を表したい。

注

- 1) 1948 年に建国されたイスラエルと, 現在国家を持たないパレスチナの呼称については, 研究者の立場によってさまざまな表記がなされている。本論文では, イスラエル建国以前, イギリスが委任統治下におさめていた地域全域(つまり今日のイスラエルと, ヨルダン川西岸地区, ガザ地区からなるパレスチナ自治区)を, 歴史的パレスチナと表記することとする。
- 2) 今日のシリア, レバノン, イスラエルを含む歴史的パレスチナ, ヨルダンをさす。
- 3) アン・ナビー・イリーヤ・アル・ハイイの「ハイイ」とは, 「生きている」という意味である。預言者エリヤが死を経ることなく, 燃える馬車に乗って昇天したという, 旧約聖書の故事(列王記下 2 章)に由来している。こちらの呼称は宗教・教派かわらず, すべての人びとによって使われているが, マール・エリヤスより頻度は低い。彼はこの, 昇天したときの姿でアイコンに描かれることが多いが, ほかに修行中にカラスが食べ物を運んでくるのを待つ姿や, カナアンの豊穡神バアルの神官を打ち負かす姿で描かれることもある。三番目の姿は, ガリヤヤ地方のメルキト派カトリック信徒に好まれる傾向がある。
- 4) マカームは直訳すれば「立ち処」, マザールは「訪問した処」であり, つまり聖者が顕現した場所を意味する。聖者廟と訳されることもあるが, ことにアル・ハディル崇敬にかんしていえば, 「廟」, すなわち墓所と訳すのは不適當であるため, アラビア語をカタカナ表記することとした。実際, 聖者崇敬のマカームには, 緑の布で覆われた棺状のものが安置されていることが多い(写真 3 参照), そのすべてが墓であるとは限らない。ガリヤヤ地方に数あるアル・ハディルのマカームのなかでも高名な, とあるマカームで人びとに尋ねたところ, 「棺の中身は空。なぜならアル・ハディルは生きておられるのだから」という答えが返ってきた。
- 5) アラビア語で大破局を意味するナクバ(al-Nakba, النكبة)は, パレスチナ史においては 1948 年のイスラエル建国前後に起こったシオニスト民兵によるアラブ・パレスチナ集落の破壊, 土地の収奪, 住民追放・虐殺をさす。イラン・バベなどイスラエルに批判的な研究者のなかには, 民族浄化(ethnic cleansing)の訳語をあてはめる者もいる。
- 6) 正式名称はアバー・ザッルであるが, サラファンドをはじめとしたレバノン南部の人びとには, 彼はアバー・ザッルの通称でより親しまれている。後述するように, 彼はレバノン南部で聖者崇敬の対象になっており, サラファンドにある彼のマカームの入り口の表記も, 通称のアバー・ザッルである。このため, 以下本論文でも彼のことをアバー・ザッルと表記する。なお, レバノン南部以外の地域で, 彼をアバー・ザッルと呼ぶか否かについては, 現在のところ未確認である。
- 7) 婚姻により, キリスト教からシア派に改宗した他村出身の女性が数名居住しているとのことである。ただし, 彼女らも今はシア派信徒であるため, サラファンドの住民はすべてシア派と考えて差支えない。
- 8) 2014 年 1 月 6 日および 8 日, ファッスータおよびハイファにて聞き取り。
- 9) ベツレヘムの南西約 4km のところに位置するこの村は, その名もアル・ハディルという。現在, 村の中心部には東方正教の聖ゲオルギオス聖堂があり, この場所は病氣平癒や子宝祈願に非常に靈驗のあるマカームとして知られている。現在, アル・ハディル村の住民約 1 万人はすべてムスリムであり, 聖堂の鍵を預かっているのも向かいに住むムスリムの一家であるが, 村民たちは頻繁に聖堂で願掛けをしている。ベツレヘムなどに住むキリスト教徒にも

- 人気の高いマカームであり（菅瀬 2012: 24-26）、毎週日曜日におこなわれる聖体礼儀に参加する人びとも多い。
- 10) 聖ゲオルギオスは竜退治で知られ、アイコンでは竜を槍で刺し殺す若い騎士の姿で描かれることが圧倒的に多い（写真1参照）。この聖ゲオルギオス祭は、竜退治を記念するものである。各地の聖ゲオルギオス聖堂で宗教儀礼が執り行われるが、注9で触れたアル・ハディル村にある聖ゲオルギオス聖堂のそれはことに有名であり、各地から巡礼者が集まる（菅瀬 2012: 24-26）。
 - 11) 預言者エリヤがカルメル山で、フェニキアの豊穡神バアルの祭司と雨乞いをめぐって対決し、勝利をおさめた故事（旧約聖書列王記 18章参照）を祝う祭である。カルメル山のステラ・マリス修道院内にある、預言者エリヤ聖堂でおこなわれ、ガリラヤ地方各地からキリスト教徒のみならず、ムスリムやドルーズまで巡礼に訪れる（ibid: 31-33）。
 - 12) 聖ゲオルギオスは4世紀初頭、当時ローマ帝国の支配下にあったパレスチナの郡都リッダ（現在イスラエル領内。ヘブライ語名ロッド）で殉教したとされる。これを祝う殉教祭は、シャーム地方、ことにパレスチナでは、殉教地の名を取ってリッダ祭と呼ばれている。祭の前日と当日、リッダの聖ゲオルギオス聖堂には、地下にある聖人の墓所に詣でようとする者が長蛇の列ができる（菅瀬 2012: 26-29）。
 - 13) モフルは直径5cm～10cmほどの、小さな素焼きのメダルである。シーア派で三代目イマームとされるフセインの殉教地、カルバラーの土を混ぜて作られているとされ、シーア派信徒はメッカの方角に向けて礼拝用絨毯の上に置き、額をつけて礼拝する。また、カルバラー巡礼の土産物としても好まれている。
 - 14) 筆者は2009年7月、ヨルダンのサルトにある東方正教の聖ゲオルギオス聖堂を訪れたが、そのとき半年前（同年1月）に起こったという奇跡について、門番から聞かされた。彼によれば、マカームが光り輝いた次の日、聖堂内の床には聖者の足跡が出現し、目の不自由な少女が癒されたとのことである（菅瀬 2012: 35）。
 - 15) 1997年4月11日、サラファンドにて聞き取り。
 - 16) 2011年2月1日、サラファンドにて聞き取り。
 - 17) アーシューラーは、イスラーム世界の暦であるヒジュラ暦の1月に相当する、ムハラム月10日に祝われる。2010年12月8日よりヒジュラ暦1432年に入っているため、この年アーシューラーは2010年12月18日におこなわれたことになる。
 - 18) 筆者がサラファンドのマカームを訪問した1997年4月9日は、ちょうどヒジュラ暦の12月に相当する巡礼月の初日にあたっていた。つまり、当該年のアーシューラーは、1996年5月におこなわれたはずである。
 - 19) 2012年2月1日、サラファンドにて聞き取り。
 - 20) 2012年1月31日、サラファンドにて聞き取り。
 - 21) 2012年2月1日および3日、サラファンドにて聞き取り。
 - 22) マグドゥーシェは、サイダやサラファンドを見下ろす山の上に位置する、レバノン南部でも名の知られたメルキト派カトリックの村である。「待ちわびる聖母の洞窟（Magāra sayyda al-Mantara, مغارة سيدة المنطرة）」と呼ばれる洞窟があり、イエスがサイダ（シドン）で活動を展開していた折に、マリアがここで息子の帰りを待っていたという伝承が残っている。ここには内戦中、サイダ近郊のパレスチナ難民キャンプ、アイン・アル・ヒルウェの攻防戦時（1982年）に破壊されたものの、近年再建された聖母子像を戴く塔があり、ジュニエの「レバノンの聖母」の塔と同様、宗教・教派を問わぬ人びとの巡礼の対象となっている。
 - 23) レバノン南部の人びとは、カーナがイエスの最初の奇跡の地であるカナであると信じており、また同地には初期キリスト教徒が手彫りした洞窟が残っている。カーナはシーア派ムスリムと若干のキリスト教徒が住む村であるが、この洞窟もまた、宗教・教派を問わず、人びとの憩いの場となっている。
 - 24) 2011年2月1日、サラファンドからマグドゥーシェへ向かうタクシー車中で聞き取り。
 - 25) 2012年2月3日、サラファンドにて聞き取り。また、アバー・ザッルの生涯については、『岩波イスラーム事典』のアバー・ザッルの項のほか、以下のウェブサイトを参考にした。
http://www.iranchamber.com/personalities/ashariati/works/once_again_abu_dhar1.php
 - 26) 2012年1月31日および2月3日、サラファンドにて聞き取り。
 - 27) 2012年1月31日、サラファンドにて聞き取り。

参考文献

〈日本語〉

- 赤堀雅幸
1996 「聖者が砂漠にやってくる——知識と恩寵と聖者の外来性について」『オリエント』38(2): 103-120。
2005 「スーフイズム・聖者信仰複合への視線」赤堀雅幸・東長 靖・堀川 徹編『イスラーム地域研究叢書7 イスラームの神秘主義と聖者信仰』pp. 1-18, 東京大学出版会。
- 家島彦一
1991 「ムスリム海民による航海安全の信仰——とくに Ibn Battūta の記録にみるヒズルとイリヤースの信仰」『アジア・アフリカ言語文化研究』42: 117-135。
2006 『海域から見た歴史——インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会。
- 私市正年
1996 『イスラーム聖者——奇跡・予言・癒しの世界』講談社現代新書。
2005 「マグリブ中世資料にみえるバラカ概念の変化と聖者崇拜の発展」『東洋史研究』64(1): 74-103。
2009 『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』山川出版社。
- 末近浩太
2013 『イスラーム主義と中東政治——レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』名古屋大学出版会。
- 菅瀬晶子
2008 「ヒズブッラーを支持する『イスラエル市民』たち——アラブ人市民のエスニシティ」黒木英充編『「対テロ戦争」の時代の平和構築：過去からの視点、未来への展望』東信堂。
2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』溪水社。
2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』山川出版社。
2012 「豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬」『民族紛争の背景に関する地政学的研究 vol. 19』pp. 1-75, 大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 東長 靖
2008 「第一章 イスラームの聖者論と聖者信仰——イスラーム学の伝統のなかで」赤堀雅幸編『異文化理解講座7 民衆のイスラーム——スーフイー・聖者・精霊の世界』山川出版社。
- 村山和之
2007 「不死なる緑衣を纏う聖者の伝承と現在——ヒドルとヒズルの世界」和光大学総合文化研究所 永澤峻編『死と来世の神話学』pp. 323-347, 言叢社。

〈英語〉

- Augustinović, A. o.f.m.
1972 *"EL-KHADR" and the Prophet Elijah*. Jerusalem: Franciscan Printing Press.
- Khalidi, Walid (ed.)
1992 *All That Remains: The Palestinian Villages Occupied and Depopulated by Israel in 1948*. Washington D.C.: Institute for Palestine Studies.
- Khuri, Fuad I.
1975 *From Village to Suburb: Order and Change in Greater Beirut*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

- 2004 *Being A Druze*. London: Druze Heritage Foundation.
- Korom, Frank J.
2003 *Hosay Trinidad: Muharram Performances in an Indo-Caribbean Diaspora*, Philadelphia University of Pennsylvania Press.
- Shaery-Eisenlohr, Roschanack
2008 *Shi'ite Lebanon: Transnational Religion and the Making of National Identities*. New York: Columbia University Press.
- Stanley, Arthur Penrhyn
1871 *Sinai and Palestine*. London: J. Murray.

〈アラビア語〉

- ‘Arrāf, Shukrī
1993 *Tabaqāt al-Anbiyā’ wa al-Awliyā’ al-Sālihīn fī al-Ard al-Muqaddasa*. Tarshīhā al-Juz’ al-thānī: Matba‘a Ikhwān Makhwal.
- Farīha, Anīs
1989 *al-Qarya al-Lubnāniyya: hadāra fī Tariq al-Zawāl*. Tarābul: Jarūs Burus.
- Al-Rīs, Fāiz
2009 *Jabal ‘Āmil: ‘Ard al-Qaddāsa*. Beirut: Dār al-Safwa.